

脳腫瘍

失語症

右同名半盲

就職に向けた支援

～失語症に対応したM-メモリーノートの活用と  
疲労のマネジメントにより、自立的な作業が可能となった事例～

失語症を理由に限定的なメモの使用にとどまっていた対象者に、WCSTの結果を踏まえた失語症に対応したM-メモリーノートの使い方を提案し、M-ワークサンプル（訓練版）の作業場面での活用を促した。また、作業場面で、疲労によりエラーが生じることを理解し、疲労のセルフマネジメントの重要性を認識した事例。

WCST

M-メモリーノート

疲労のセルフマネジメント

1. 事例の概要

- （1）年齢、性別：28歳、男性。
- （2）障害状況：26歳時に行った脳腫瘍の手術による後遺症として、失語症（重度）ならびに右同名半盲が認められた。

失語症の具体的状況としては、対面での日常会話を行う際の短文理解は可能だが、発話に際して適切な単語が浮かびにくく時間を要し、読み書きが困難であった。記憶面では、聴覚性記録の即時記録および遅延記録に問題があった。
- （3）障害認識：O2さんは脳腫瘍の手術をきっかけに失語症や右同名半盲の障害を自覚していた。本人は、それぞれの症状について対処行動の必要性を認識しており、右同名半盲については意識して右側に注意して歩行する行動が、失語症については予定管理のために第三者が記入したメモ帳を携帯して「見る（言葉として読めないが、意味は理解できる）」行動が習慣化していた。服薬管理は自分で、通院管理は母親が行っていた。
- （4）神経心理学的検査結果：浜松方式高次脳機能検査の結果を表2-224に示す。

表2-224 O2さんの神経心理学的検査結果

| 検 査 名           |      | 結 果   |
|-----------------|------|-------|
| 浜松方式高次脳機能スケール** |      |       |
| 仮名ひろいテスト        | 正答   | 38 個  |
|                 | ミス   | 0 個   |
| 記録力テスト          | 内容理解 | ×     |
|                 | 直後   | 0 個   |
| 動物名想起テスト        | 5分後  | 0 個   |
|                 | 正答   | 11 個  |
| 7シリーズ           | 誤答   | 2 個   |
|                 | 計算速度 | 120 秒 |
| 数唱              | 誤    | 2 個   |
|                 | 順唱   | 5 桁   |
|                 | 逆唱   | 3 桁   |

備考) \*：浜松方式高次脳機能スケールは、職リハ機関にて実施。  
本事例については、浜松方式高次脳機能スケールの開発過程で試作された前頭葉機能テストが用いられている。

数値としては全ての面（注意配分、即時記録、遅延記録）に問題があるという結果が示されたが、失語症が背景にあるために単純な解釈はできないとされた。WAIS-Rは、失語症のため実施されていない。

## 2. 職リハサービスの目標と概要

### （1）目標

予定の管理を、他者の記入したメモ帳に沿って行っていたため、失語症に対応した方法でM-メモリーノートを活用し、自立的な作業遂行を目指すとともに、対応可能な作業の検討や作業場面でのコミュニケーション方法を確立することを目標とした。疲労の自覚を促し、疲労の蓄積によりエラーが生じないように、休憩のセルフマネジメントについて支援することとした。

### （2）カリキュラム

O2さんに実施したトータルパッケージのカリキュラムを表2-225に示す。1日目は、MSFASによりストレスや疲労の生起に関連する情報収集と個別相談とM-メモリーノート集中訓練を実施した。2日目の午前中にはWCSTを、2日目午後から3日目には、事務課題、OA課題を中心にM-ワークサンプル（簡易版）を、3日目から7日目にはM-ワークサンプル（訓練版）を実施した。M-ワークサンプル（訓練版）では、数値チェック、ピッキング、数値入力、検索修正、物品請求書作成を実施した。

表2-225 O2さんに実施したトータルパッケージカリキュラム

|       | 1日目       | 2日目                                                          | 3日目                                    | 4日目                                 | 5日目            | 6日目                                                       | 7日目                                     |
|-------|-----------|--------------------------------------------------------------|----------------------------------------|-------------------------------------|----------------|-----------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 9:45  | -----     | 作業準備                                                         | 作業準備                                   | 作業準備                                | 作業準備           | 作業準備                                                      | 作業準備                                    |
| 10:00 | オリエンテーション | GW                                                           | GW                                     | GW                                  | GW             | GW                                                        | GW                                      |
| 10:15 | MSFAS作成   | WCST                                                         | 簡易評価<br>・文書入力<br>・検索修正                 | 数値チェック<br>L6<br><br>検索修正<br>L1～L2   | 検索修正<br>L4     | 検索修正<br>L4～5<br><br>ピッキング<br>L5                           | 物品請求書<br>L1～L3                          |
| 12:00 |           |                                                              |                                        |                                     |                |                                                           |                                         |
| 13:00 | MN訓練      | 簡易評価<br>・ファイル整理<br>・数値入力<br>・コピー＆ペースト<br>・数値チェック<br>・物品請求書作成 | 簡易評価<br>・作業日報集計<br><br>数値チェック<br>L1～L6 | 簡易評価<br>・ピッキング<br><br>検索修正<br>L2～L4 | ピッキング<br>L1～L4 | 数値入力<br>L1～L6<br><br>コピー＆ペースト<br>L1～L4<br><br>物品請求書<br>L1 | 数値入力<br>L1～L4<br>(試行数、ブロック<br>数を変えて再実施) |
| 15:30 | GW        | GW                                                           | GW                                     | GW                                  | GW             | GW                                                        | GW                                      |

備考) GW：グループワーク、MN：M-メモリーノート

## 3. 結果

### （1）WCSTの結果

表2-226にWCSTの結果を示す。

## (ア) 説明と練習

失語症のため、WCSTの標準的教示では理解が不十分になると判断し、次のような教示を行った。

まず、KWCSTで行われている通常の口頭説明を行い、次に、練習モードの画面で、指導者が実際に実施しながら口頭説明を行った。その後、O2さんに練習を促したが、本人は練習を拒否し実施しなかった。そこで、補完手段としてカテゴリー名に振り仮名のついたカテゴリー名カードを導入した。導入にあたっては、指導者がポインティングをしながらカテゴリー名を読み上げた後、O2さんにもカテゴリー名を読み上げさせた。この後、再度練習モードによりO2さんに練習するよう促し、5試行の練習を行った。この段階で、本人は「同じものを選ぶ」という意味を「おおまかに理解できた」と発言したので練習を終了した。

## (イ) セッション1

最初の「色」カテゴリーへの反応では、正カテゴリーをスムーズに特定し、カテゴリーを達成することができた。続く「形」と「数」のカテゴリーについても、カテゴリーの変更時に効率的な反応ができており、正カテゴリーの継続も可能だった。しかし、徐々にエラーが増加し35試行目でO2さんは反応できなくなった。この時点でO2さんにカテゴリー内容を確認した結果、「形」と「数」のカテゴリー名は、カテゴリー名カードを見ながら読み上げることができたが、「色」カテゴリーは読み上げられず意味もわからないという感想を得た。このとき、指導者がカテゴリー名カードを指さして『これは「色」です。』と説明をしても、O2さんは、『「色」が何のことなのか思い出せない』と答えた。また、声に出して「色」と言うことができずにいたことから、「形」と「数」の他に何かのカテゴリーがあることは理解できても、そのカテゴリー名は何だったのかを想起できず、言葉にすることもできない状態であると推察された。

終了時点で、CAIは4を達成したが、セッション終了後にカテゴリー名を確認したところ、O2さんは3つのカテゴリー名を復唱できなかった。また、O2さんは「どういうことを自分がやったのか、今は分からなくなってしまっている。」と述べていた。

## (ウ) セッション2

セッション2では通常の教示に加え、カテゴリー名カードを用いてカテゴリー名の読み上げを繰り返し行った後、検査を実施した。セッション2では最初の「色」カテゴリーの特定から試行錯誤によるエラーが続き、正しいカテゴリーへの反応を継続できなかった。そこで再度、指導者と一緒にカテゴリー名カードによるカテゴリー名と内容の読み上げを行ったが、その後もエラーが続いた。次に、カテゴリー名カード上の名称をポインティングしながらカードを選択し、画面上に「×」のフィードバックが出たらカテゴリー名カードを見ながら考える方法を提案し、実施させた。しかし、この方法では画面上のフィードバックとカテゴリー名カードへの注意の分配を適切に行うことができなかった。

そこで、テストをいったん中止し、カテゴリー名と各カテゴリー内容に対応したイラストの描かれた「視覚的カテゴリー内容シート」を補完手段として導入した。指導者はこのシートを用いて、O2さんにカテゴリー内容の説明を行った。例えば、「色」カテゴリーの場合には、「いろ」と読み上げてから対応するカテゴリー内容（「あか、あお、きいろ、みどり」）を読み上げ、同時に、イラスト上を手で撫でるようなジェスチャーを加えた。他のカテゴリーも同様に、カテゴリー名と対応するカテゴリー内容を読み上げながら、「形」

の場合はイラストを形通りに指でなぞるジェスチャーを、「数」の場合はイラストの数だけポンポンと指先で軽く叩くジェスチャーを加えた。これらの説明の後、「何か反応に迷うことがあったら、このシートを見てよく考えてから反応をしてください。」と指示をし、テストを再開した。

この補完手段を導入した後、「色」カテゴリの選択は可能となり、正反応を継続できるようになった。「形」カテゴリへの変更時には、指導者は「形」と言いながらPC画面上の見本刺激の「形」をなぞるジェスチャーを行った後、視覚的カテゴリ内容シートをポインティングした。そして、O2さんには、「同じカテゴリをイメージして反応をしてください」と指示し反応を促した。その結果、「形」カテゴリの正反応を継続することができた。

次の「数」カテゴリでは、指導者は「数」といいながらPC画面上の見本刺激の「数」までカウント（数の読み上げ）しながら、画面や視覚的カテゴリ内容シートを指で軽く叩くジェスチャーを行った。結果的には、この支援による正反応は得られなかったものの、CAは5となった。また、O2さんは、「今までよりもはっきりと検査の実施方法を理解できた」、と述べた。

#### （エ）セッション3

セッション2で行った視覚的カテゴリ内容シートに関する教示を再度行った。セッション開始後、1試行目で正しいカテゴリを選択できず、O2さんの手が止まった。そのため、指導者は「色」といいながら画面の選択刺激のカード4枚をそれぞれ撫でるようなジェスチャーを行い、「雰囲気を選んでください。」と教示した。教示後、O2さんは「色」カテゴリへ反応することができ、それと同時にO2さんは今までになく深く理解できたという態度を示した。次の、「形」カテゴリでは、途中で正カテゴリへの反応の継続ができなくなった。指導者は、PC画面と視覚的カテゴリ内容シートをポインティングしてO2さんにゆっくりと考えるよう指示をしたところ、正カテゴリの選択ができるようになった。

「数」カテゴリでは、O2さんは正カテゴリを特定し反応を継続することも可能であったが、反応時に迷いが見られていた。そこで、指導者はPC画面と視覚的カテゴリ内容シート上で正カテゴリをポインティングした。O2さんは指導者のポインティングをきっかけにして、その後、迷わずに正カテゴリへの反応を継続することが可能となった。

28試行目で指導者は、視覚的カテゴリ内容シートの正カテゴリ名にポインティングデバイスを置き、カテゴリが変化したら他のカテゴリを試して、正カテゴリを確認できたらそのカテゴリ名のところにデバイスを移動させるよう提案をした。その結果、O2さんは指示された通りにデバイスを活用し、正カテゴリの反応を繰り返せるようになった。これらの支援によって、セッション3では、保続性エラーは0になり、CAは更に上昇して6となった。

#### （オ）セッション4

セッション2で行った視覚的カテゴリ内容シートに関する教示を行った後、セッション4を開始した。このセッションでは、セッション3までに導入した補完手段の使用をO2さんに完全に任せた。O2さんはシートとポインティングデバイスを確認してから反応すること、カテゴリ変更時にはシート上のポインティングデバイスを操作し正カテゴリを特定しやすくすること等の手続きを完全に習得して独力で実施する

ことができた。また、この時点で、ポインティングデバイスを規則的かつスムーズに動かす様子が観察された。セッション終了後に気づいたルールの説明を促したところ、シートのポインティングにより、カテゴリーの規則的変化のルールについて説明することができた。

セッション4のCAは前セッションと同様6ではあったが、指導者の援助を受けることなく補完手段が活用できたことから、作業場面での補完手段の活用可能性が示された。

(カ) セッション5

セッション5の実施前にセッション4の結果をO2さんにフィードバックをした。これに加えて指導者から、カテゴリーの規則的変化のルールを改めて説明した。これらの教示を行った結果、セッション5では、O2さんはこれまで学習した補完手段を活用しつつ、カテゴリー変更時のエラーを1回のみにすることが可能となった。

セッション終了後にO2さんは、カテゴリーの規則的変化は指導者の教示どおりだったと感想を述べるとともに、正カテゴリーが一定回数継続するというルールを推測できたと報告した。

(キ) セッション6

セッション6の実施前に、指導者から正カテゴリーの継続回数を教示し、セッション5の結果をPC画面に表示して正カテゴリーの継続回数の確認を行った。確認後、指導者は、カテゴリー変更順序と正カテゴリーの継続回数のルールを守ると、全問正解できるので挑戦してみるよう教示したが、結果はセッション5と同様のものではなかった。

セッション6の終了後、O2さんは、これ以上、何かを考えながら検査をすると間違えそうだったので同じやり方で検査を行ったこと、正カテゴリーの継続回数の確認はできなかったことを報告した。

表 2-226 O2さんのWCST結果

| セッション数      | カテゴリー達成数（CA） | 非保続性エラー | 保続性エラー |
|-------------|--------------|---------|--------|
| 1 *         | 4            | 1 6     | 6      |
| 2 * *       | 5            | 1 2     | 4      |
| 3 * *       | 6            | 9       | 0      |
| 4 * * *     | 6            | 11      | 0      |
| 5 * * * *   | 7            | 6       | 0      |
| 6 * * * * * | 7            | 6       | 0      |

備考) \* : 補完手段としてカテゴリー名カード（ふりがな付き）を導入した。  
\* \* : 視覚的カテゴリー内容シートを導入し、ポインティングをした。  
\* \* \* : 画面や視覚的カテゴリー内容シートのカテゴリー内容の読み上げとポインティングをした。  
\* \* \* \* : カテゴリーの規則的変化を教示した。  
\* \* \* \* \* : 正カテゴリーの継続回数を教示した。

(ク) まとめ

O2さんの場合、WCSTの実施方法について理解が進みにくかったことから、有効な補完手段や補完行動を模索した。その結果、口頭説明や文字よりも、カテゴリー内容を色や図形を用いて作成したカテゴリー内容カードや個々のカテゴリー内容に応じたジェスチャーによる説明が有効であった。このことから、画像や動

作等によって構成された視覚的な補完手段の有効性が示唆された。

## (2) M-メモリーノート集中訓練の結果

参照・構成・記入の各訓練におけるブロック数と、平均正答率を表2-227、図2-107に示す。

参照訓練の評価期(BL)では、O2さんは該当箇所を検索しても読み上げることはできなかったため、指さしにより解答を確認する方法をとった。評価期の結果を見ると、各試行における反応時間が長く、参照箇所や検索内容にもエラーが多く正答率は0%であった。訓練期(TR)の1ブロック目では、1試行毎にエラーの詳細を丁寧にフィードバックしたが、失語症の影響からO2さんにエラー内容の理解を促すことは困難であった。そこで、参照訓練の訓練期(TR)の2ブロック目からは、4つの項目の内、「schedule」と「今日のto-do」の2項目を訓練対象項目とし、「to-do list」と「重要メモ」については訓練対象から除外した。また、この時から補完手段の一つとして「schedule」と「今日のto-do」に対応した書き分けのためのキーワードを付箋紙に書き込み掲示し、それを参照しながら訓練を行った。その結果、訓練期、訓練後の評価期において徐々に反応は安定し、100%の正答率を得ることができた。続く構成訓練ではエラーが生じたものの、自己修正が可能だった。

記入訓練では、失語症の影響により、教示を聞き取って記入することは難しかったため、指導者が教示した後、構成訓練で使用した付箋を手渡し、その付箋を見ながら該当箇所に記入させた。その結果、評価期(BL)から100%の正答率を得ることができたことから、一定の補完手段を用いることで正確な書き分けが可能であるものと判断した。

なお、訓練全般を通して、日付独特の言い回し(ついたち、ふつか、みっか、よっか、いつか、むいか、なのか、ようか、このか、とうか、はつか等)に対する聞き返しが確認された。これは、教示を「いちにち、ににち」等と読み替えることで理解することが可能であった。

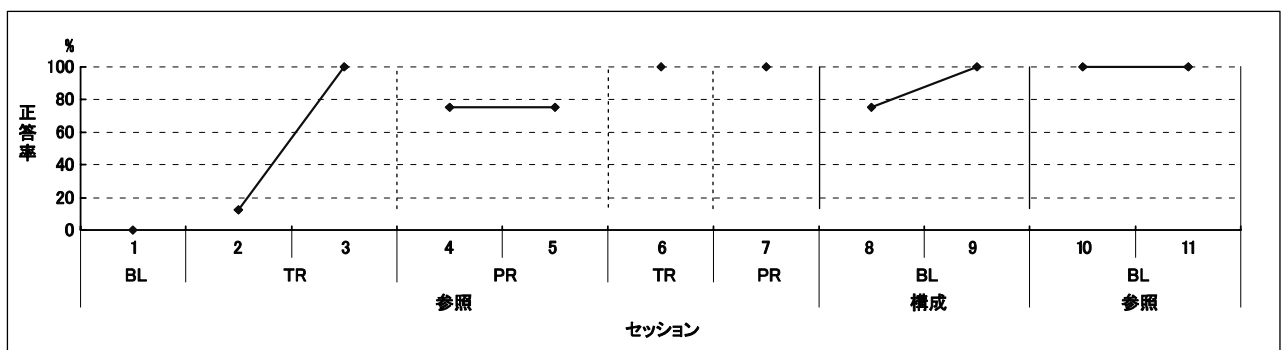


図2-107 O2さんのM-メモリーノート集中訓練結果

表 2-227 O2さんの参照・構成・記入におけるブロック数、および平均正答率

|        | 参照 |      |     | 構成 |    |    | 記入  |    |    |
|--------|----|------|-----|----|----|----|-----|----|----|
|        | BL | TR * | PR  | BL | TR | PR | BL  | TR | PR |
| セッション数 | 1  | 3    | 2   | 2  | —  | —  | 2   | —  | —  |
| 平均正答率  | 0  | 56   | 100 | 89 | —  | —  | 100 | —  | —  |

備考) \* : 参照訓練の訓練期からは、「スケジュール」と「今日のto-do」に絞って訓練を行った。  
また、付加的指導として「スケジュール」と「今日のto-do」のキーワードを説明した。

### (3) M-ワークサンプル（簡易版）の結果

O2さんに対し実施した各課題におけるO2さんの平均正答率とエラー内容を表2-228～表2-230に示す。数値チェック、数値入力、コピー&ペーストでは、エラーは見られず、教示内容の理解もスムーズであった。O2さんによれば、「パソコンは、仕事で使っていたので、基本的な操作の想像がつく分、課題の教示が理解しやすかった。」と述べていた。

作業日報集計ならびにファイル整理は、教示が理解できず、実施に至らなかった。また、物品請求書作成では、視力の影響により右半分の視野にあたる部分への注意力がそがれ、カタログの右半分のページの見落としによるエラーが生じていた。

いずれの課題についても、失語症への対処としては、読み上げはできなくても、文字の照合による検討はできたこと、漢字仮名混じり文の場合には読めなくても内容は想定できること（例：「紙」という漢字から紙という画像はマッチングでき、実物も想起できるが、読み上げられない）から、実施可能な作業もあることが確認できた。

表 2-228 O2さんの事務作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | 数値チェック | 物品請求書作成 | 作業日報集計 | ラベル作成 |
|-----------|--------|---------|--------|-------|
| 実施の有無     | ○      | ○       | —      | —     |
| 平均正答率 (%) | 100    | 83      | —      | —     |
| エラー内容     | —      | 右半側無視   | —      | —     |

備考) — : 未実施。

表 2-229 O2さんのOA作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | 数値入力 | 文書入力  | コピー&ペースト | ファイル整理 | 検索修正   |
|-----------|------|-------|----------|--------|--------|
| 実施の有無     | ○    | ○     | ○        | —      | ○      |
| 平均正答率 (%) | 100  | 0     | 100      | —      | 80     |
| エラー内容     | —    | 不足・過剰 | —        | —      | 詳細入力ミス |

備考) — : 未実施。

表 2-230 O2さんの実務作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | ピッキング | 重さ計測 | プラグタッパ | ナブキン折り |
|-----------|-------|------|--------|--------|
| 実施の有無     | ○     | —    | —      | —      |
| 平均正答率 (%) | 83    | —    | —      | —      |
| エラー内容     | 個数ミス  | —    | —      | —      |

備考) — : 未実施。

### (4) MSFASによる情報収集の結果

MSFAS（利用者用）Fシートによれば、作業でエラーが生じたり、手続きを覚えるのに時間を要するような場面において、O2さんは、「自分が悪い、努力が足りない」と考え、必要以上にがんばりすぎて疲労が増加し、さらにその疲労によりエラーが生じやすくなるという悪循環に陥りやすいことが把握された。また、

失語症に対応した課題についても補完手段を頼らず自らの力そのものを高めようとして、がんばりすぎる傾向があることも把握された。

休憩も取らずに失語症を治すために努力する理由について、O2さんは、「少しでも障害が良くなるようにしたいためだ」と述べていた。

#### （５）支援方針の検討

O2さんの場合、現在携帯しているメモ帳よりも機能的なシステム手帳形式のM-メモリーノートで失語症の状況に対応させて導入することで、自立的な作業や行動が可能となると判断し、活用をすすめていくこととした。補完手段の活用のための指導方法は、WCSTの結果を参考とすることにした。

また、MSFASによる情報収集から、生活のあらゆる場面で失語症を治すための実践的なリハビリテーションの場として意識し、とにかく何でも頑張ってみようと考えていること、失語症を治すためには、休憩に時間を費やすよりも、作業や訓練を継続する必要があると考えていることが把握された。これらのことから、疲労を無視して作業を継続している様子が観察された場合は、疲労によりエラーを招く可能性があることを伝え、疲労のセルフマネジメント・トレーニングを行うことにした。

#### （６）M-ワークサンプルを活用した支援

##### （ア）M-ワークサンプル実施時における失語症に対応したM-メモリーノートの活用

O2さんへのM-メモリーノートの導入については、M-メモリーノートの集中訓練の結果から、次の点に配慮をした。

①記入箇所は、「schedule」と「今日のto-do」を中心とすること。

②記入は指導者らのメモを参照しながら行うこと。

③1日のスケジュールで定期的に行われる事項や数日前に経験した事項については、以前に記入した内容を参考にしながら記入するよう促すこと。

④記入した内容を参照しながら自立的な行動を取れるよう支援していくこと。

1日目のM-メモリーノートの使用状況から、指導者から示されたメモ等を参考にした記入は問題なくできること、漢字に読み仮名をつければ理解可能（読み上げが可能とは限らない）であること、記入した内容の理解も可能であること、が確認された。

3日目までは、時折、M-メモリーノートの存在を忘れ、予定していた行動が取れず指導者からの指示を受ける場面が見られた。また、朝・夕のグループワークでは、M-メモリーノートへの記入についてキーワードに応じた書き分けができず指導を受ける様子が観察された。そのため、O2さんには、指導者から書き分けのためのキーワードへの注意喚起、定期的な参照による予定の確認、行動記録の必要性についての説明を繰り返し行った。

4日目には、O2さんから朝のグループワークにて、「最近では毎日、訓練が終了した後にM-メモリーノートを見るようになり、その日の出来事を振り返るようになった。」という感想を得た。そこで、過去数日分



のM-メモリーノートの記入内容からその日の出来事を想起し説明してもらったところ、M-メモリーノートの記入内容そのものの読み上げはできないものの、それを手がかりに出来事を思い出し詳細に説明することができた。また、この頃から、過去の記録から適切と思われる単語を拾い出して記入する場面が多く観察されるようになった。

#### （イ）作業名や作業内容の想起におけるM-メモリーノートの活用

M-ワークサンプル（訓練版）に関する作業手順は、口頭指示で概ね理解できた。しかし、日が変わると作業手順を忘れてしまうこともあったため、数値チェック、ピッキング、物品請求書作成、検索修正課題については作業の内容や手続きを重要メモに整理した。その際、作業指示書に見られるような文章を使用せず、O2さんの希望に沿って「単語」を中心としたメモの内容とした。その内容とは、各作業の手続きで使用する物品名や、その手続きを象徴するような単語（例：照合、確認、検索、計算、入力等）を順にならべて記載した。O2さんは、このようなメモの作成を希望した理由として、障害を受障する以前に事務的な作業やPC作業に慣れ親しんでいたので手続きの詳しい説明は必要が無いこと、ひらがなやカタカナによる文章よりも漢字で書いた単語が理解しやすいこと、を上げた。

#### （ウ）疲労への対処

1日目から2日目にかけてO2さんは、失語症を治すためとして、休憩をほとんど取らずに作業を継続し、指導者から休憩を促しても受け入れようとしない場面が観察されていた。その時点では、疲労の影響によるエラーは生じていなかったが、MSFASによる情報収集から、この状況が続くことで、疲労が蓄積しエラーが生じやすくなるという悪循環に陥る可能性があると考えられた。そのため、4日目からはO2さんにとって作業負荷が高く休憩の取得が必要になる検索修正課題（図2-108）を実施し、休憩のセルフマネージメント・トレーニングを導入することとした。

検索修正課題は4日目の午前中から開始した。開始前にはO2さんに対して、疲労を感じたときには休憩を取るよう指示をした。O2さんは、午前中には疲労が見られず、休憩を促しても積極的に休憩をとろうとする様子は見られなかった。また、O2さんは、補完行動として自主的に「入力後の見直し」を行う様子が観察された。

午後になって課題の難易度が上がると同時に、肩をポキポキ鳴らす、首を回す、目を押さえる、背伸びをする、あくびをする等の行動が観察されるようになった。レベル3の評価期（BL）の1ブロック目の途中では、「疲れたので休憩したい」という申し出がO2さんからあり、20分の休憩を取得した。また、レベル4では、評価期（BL）の2ブロック目でエラーが生じた。この時、O2さんに対して指導者から、エラーが生じる次の2つの原因をフィードバックした。その1つは、難易度が上がり課題の難易度が高くなったことで、これまで行っていた補完方法だけでは対処できないエラーが生じている可能性があること、もう1つは、作業の継続や課題の難易度の上昇により疲労が蓄積しエラーが生じた可能性があること、であった。そして、疲労への対処には休憩が必要なことを指導者からO2さんに説明した。

しかし、作業を初めて30分程度しか経過していなかったことや、O2さんからの休憩の希望がでなかったことから、そのまま訓練期（TR）に移行した。その結果、1ブロック目から評価期（BL）よりも多くのエラーが生じた。そこで、まず、十分に休憩を取得させ、その上で、これまでと同様の補完行動である「入力後の見直し」をゆっくり確実にを行うよう指示し、作業を再開した。その結果、訓練期（TR）の2ブロック目では、100%の正答率を得ることができた。

5日目には、O2さんは4日目までの出来事を意識し、疲労により作業へ集中できなくなってきたと自己判断した時は、自ら休憩を取り、休憩時間ならびに作業時間の調節を行う場面が増加した。

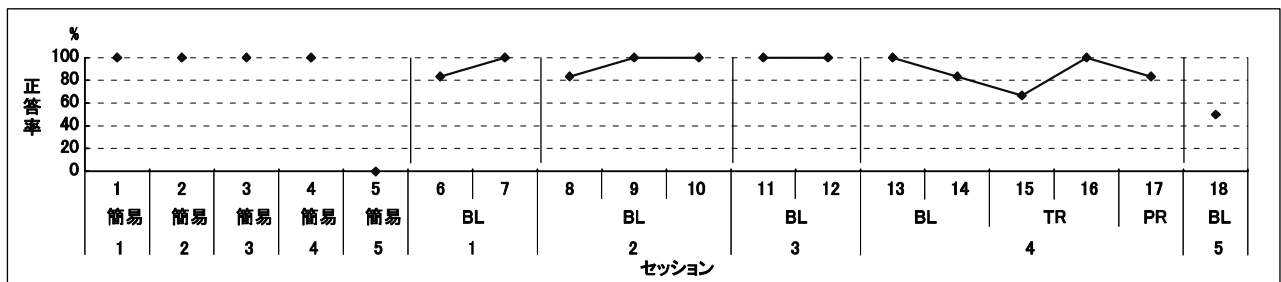


図 2－108 O2さんの検索修正の結果

O2さんの場合には、失語症のため、トータルパッケージ実施前には、積極的に自分でメモを作成したり活用したりする場面は限られていた。しかし、WCSTを実施する中で、失語症に対応した補完手段の活用方法を導き出すことができ、M-メモリーノートの有効な補完手段として確立することに取り組んだ。M-メモリーノートの集中訓練では、O2さんの失語症の状態に合わせたM-メモリーノートの活用方法を提案し、さらにM-ワークサンプルの作業場面を活用して実際のM-メモリーノート使用のための訓練を行った。その結果、O2さんは補完手段としてM-メモリーノートを活用し、自立的な作業遂行が可能となった。

失語症に対応したM-メモリーノートの使用方法としては、本事例に適用した方法以外にも、指示者が本人に代わって記入をする、指示者が伝達事項を付箋にメモして本人に渡し、本人が該当箇所に貼り付ける、定型的な事項をメモした付箋を用意しておき貼り付ける、定型的な事項の一覧を用意し参考にしながら記入する、といった方法も考えられる。

また、O2さんは、補完手段や補完行動を活用して検査や作業を行っていく中で、それらを活用していても生じる疲労の影響によるエラーを体験した。この体験やその後の支援を通して、O2さんは、疲労のセルフマネジメントの必要性を認識し、自発的にマネジメントしようとする行動が見られるようになっていった。

これらの経験からO2さんは、前よりも疲労しやすくなっている障害状況や、疲労への対処として意識的に休憩を取得する必要性など、現在の自分の障害認識を深めることができた。

アスペルガー症候群

コミュニケーション能力の障害

就職に向けた支援

### ～M-メモリーノートの活用と質問スキルの向上により 自立的な作業が可能となった事例～

O4さんは、WCSTにより注意力の持続について問題を有する可能性があるかと推察された。また、M-ワークサンプル（簡易版）の実施により、物品名等の名称理解や教示内容の意味理解の困難さ、文字等の照合作業での負荷の高さ、自発的に質問ができないこと、疲労を感じても休憩が取得できないこと、を確認した。

そこで、M-ワークサンプル（訓練版）を活用し、M-メモリーノート等を用いた作業や行動上の問題改善に向けた支援を行った結果、作業方法を理解し、自立的な作業、自発的な質問、休憩の相談や依頼などを自発的に行うことが可能となった。

M-メモリーノート

疲労のセルフマネジメント

M-ワークサンプル

#### 1. 事例の概要

（1）年齢、性別：26歳、男性。

（2）障害状況：24歳でアスペルガー症候群と診断された。記憶障害は無いとされていたが、普段の生活場において約束を忘れてしまうことや、約束を手帳に書いたとしても手帳を見ること自体を忘れてしまう、という記憶障害様の状態が観察されていた。

（3）障害認識：自分の障害を「アスペルガー症候群」であると言い、コミュニケーション能力・記憶力・時間の感覚（特にスケジュール）等に問題があると説明をしていた。具体的には、自分は予定や約束、人から言われたこと等について、何かと忘れやすいので、手帳にメモをして忘れないようにしているが、うまく手帳を使えず、失敗が多いことについては自覚していた。これらの言動から、自分自身の行動傾向と生じている問題については、ある程度理解しているものの、効果的な対処方法を持つには至っていない状況であると考えられた。

（4）神経心理学的検査結果：WAIS-R、および浜松方式高次脳機能スケールの結果を表2-231に示す。WAIS-Rについては、言語性IQが平均と比較して高く、かつ言語性IQは動作性IQよりも著しく高く有意差が見られた。下位検査では絵画配列、算数が高い得点を示していたことから、計算能力の高さ、視覚的情報の整理と系統付け・推測の能力が高いことが示唆された。また、浜松方式高次脳機能スケールからは、聴覚性の記銘力のうち遅延記銘に問題が認められた。

表 2-231 O4さんの神経心理学的検査結果

| Wechsler 成人知能検査 (WAIS-R) * |            |         |        |
|----------------------------|------------|---------|--------|
| 言語性下位検査                    | 年齢別評価点     | 動作性下位検査 | 年齢別評価点 |
| 知識                         | 9          | 絵画完成    | 5      |
| 数唱                         | 9          | 絵画配列    | 11     |
| 単語                         | 11         | 積木模様    | 7      |
| 算数                         | 16         | 組合せ     | 6      |
| 理解                         | 9          | 符号      | 4      |
| 類似                         | 11         |         |        |
| 言語性知能指数                    | 106        |         |        |
| 動作性知能指数                    | 72         |         |        |
| 全IQ                        | 91         |         |        |
| 浜松式高次脳機能スケール **            |            | 粗 点     |        |
| 仮名拾いテスト                    | 正答         | 23      | 個      |
|                            | 誤答         | 7       | 個      |
|                            | 内容理解       | ○△      |        |
| 記銘力テスト                     | 直後         | 2       | 個      |
|                            | 5分後        | 0       | 個      |
| 動物名想起テスト                   | 正答         | 13      | 個      |
|                            | 誤答         | 0       | 個      |
| 7シリーズ                      | 計算速度       | 28      | 秒      |
|                            | 誤          | 0       | 個      |
| 数字学習テスト                    | 順唱         | 7       | 桁      |
|                            | 逆唱         | 7       | 桁      |
| 会話テスト                      | 単語の説明(正答数) | 2       | 問      |
|                            | 諺の説明(正答数)  | 2       | 問      |

備考) \* : WAIS-Rは、医療機関にて実施。

\*\* : 浜松方式高次脳機能スケールは、職リハ機関にて実施。

本事例については、浜松方式高次脳機能スケールの開発過程で試作された前頭葉機能テストを用いている。

## 2. 職リハサービスの目標と概要

### (1) 目標

O4さんの訴える「忘れやすさ」に対処するための補完手段としてM-メモリーノートを導入するとともに、作業場面での自発的な質問のスキルを身につけ、自立的な作業を行うことを目標とする。また、休憩の取得の相談を自発的に行い、疲労のセルフマネジメント能力の向上を図る。

### (2) カリキュラム

O4さんに実施したトータルパッケージのカリキュラムを表2-232に示す。

1日目にMSFASの作成とそれに伴う個人相談、M-メモリーノート集中訓練、WCSTを、1日目から2日目には、事務課題、OA課題を中心に、M-ワークサンプル(簡易版)を、2日目から4日目には、M-ワークサンプル(訓練版)を行った。なお、訓練版では、簡易版においてエラーが生じた文書入力、作業日報集計を実施した。

表 2-232 O4さんに実施したトータルパッケージカリキュラム

|       | 1日目                                                                                               | 2日目             | 3日目        | 4日目             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|------------|-----------------|
| 9:45  | -----                                                                                             | 作業準備            | 作業準備       | 作業準備            |
| 10:00 | オリエンテーション                                                                                         | GW              | GW         | GW              |
| 10:15 | MSFAS作成<br>MN訓練                                                                                   | 簡易評価<br>・作業日報集計 | 文書入力<br>L3 | 作業日報集計<br>L1    |
| 12:00 |                                                                                                   | 文書入力<br>L1～     |            |                 |
| 13:00 | WCST<br>簡易評価<br>・数値入力<br>・文書入力<br>・コピー＆ペースト<br>・検索修正<br>・ファイル整理<br>・数値チェック<br>・物品請求書作成<br>・作業日報集計 | 文書入力<br>L1～L3   | 文書入力<br>L4 | 作業日報集計<br>L2～L3 |
| 15:30 | GW                                                                                                | GW              | GW         | GW              |

備考) GW：グループワーク、MN：M-メモリーノート

### 3. 結果

#### (1) WCSTの結果

セッション1と2でCAは6であり、達成基準を満たしていた。これらのセッションでは、セッション後半のカテゴリー変更時に複数回の試行錯誤のエラーが続く傾向が見られた。セッション2が終了した時点で、O4さんの推測したルールを確認したところ、カテゴリー変更順序については正しく推測していたが、正カテゴリーの継続回数については正しく説明しながらも自信を持ってない様子であった。そこで、本人の説明に対し、指導者はC5さんが推測したルールが正しいことをフィードバックした。

セッション3では、これまでに推測したルールを再確認した後、できるだけエラーを少なくするよう指示し検査を行った。その結果、最初のカテゴリー変更時にはエラーが見られたが、それ以降の変更時にはエラーレスでの移行が可能となった。ただし、43行目で正カテゴリーの継続回数の計数の誤りから1試行早く移行してしまい、CAは6にとどまった。

これらの結果から、ルールの推測といった遂行機能には障害はないものの、疲労により注意の持続に問題が生じる可能性があると思われた。

表 2-233 O4さんのWCST結果

| セッション数 | カテゴリー達成数 (CA) | 非保続性エラー | 保続性エラー |
|--------|---------------|---------|--------|
| 1      | 6             | 9       | 3      |
| 2      | 6             | 9       | 1      |
| 3 *    | 6             | 2       | 0      |

備考) \*：追加指導としてカテゴリーの変更順序、正カテゴリーの継続回数指導した。

## (2) M-メモリーノート集中訓練の結果

### (ア) M-メモリーノート集中訓練

参照・構成・記入の各訓練におけるブロック数と平均正答率を、表 2-234 に示す。参照訓練の訓練前の評価期（BL）の 1 ブロック目で「今日のto-do」を「schedule」として間違った他は、エラーは生じなかった。参照訓練から記入訓練の全ての段階で、訓練期（TR）に移行することなく終了した。O4さんは、訓練中、各項目の定義やキーワードを繰り返し小さな声で復唱し、自分なりに推理を働かせながら考えている様子が観察された。

記入訓練終了後に、書き分けの方法等について気がついたこと尋ねると、O4さんは、「指導者のキーワードを手がかりとすれば、正しく書き分けができることに気づいた」と説明した。

表 2-234 O4さんの参照・構成・記入におけるブロック数、および平均正答率

|        | 参照 |    |    | 構成  |    |    | 記入  |    |    |
|--------|----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|
|        | BL | TR | PR | BL  | TR | PR | BL  | TR | PR |
| セッション数 | 3  | —  | —  | 2   | —  | —  | 2   | —  | —  |
| 平均正答率  | 96 | —  | —  | 100 | —  | —  | 100 | —  | —  |

### (イ) M-メモリーノート使用における般化

O4さんは、トータルパッケージ終了後もM-メモリーノートを継続的に使用し、スケジュールや持ち物の管理、作業手順の確認に有効に活用していた。

ただ、M-メモリーノートの使用を開始後 2 週間目の時点で、「schedule」に行動記録を一切書かなくなったことがあった。その理由をO4さんに確認したところ、「ここには予定を書くことになっているので、予定が狂った時や過去として終わった出来事は書けない。」と理解していることがわかった。そのため、「schedule」には、予定や、終わった出来事等の行動も記録することとなっている。もし、予定が実際とは違った場合には、その時に書き直し、過去の行動記録として残し、後に参考にする。」と再度、書き分けの定義を説明し、活用方法を本人と確認した。この後、本人は予定と同時に行動の記録についてもM-メモリーノートに記入し、活用するようになった。

## (3) M-ワークサンプル（簡易版）の結果

O4さんに対して実施した各課題における平均正答率とエラー内容を、表 2-235～表 2-237 に示す。

作業日報集計では、作業を開始したにもかかわらず、時折、問題用紙と集計用紙を眺めている時間（数分間）が 2～3 度続いた。そのため、O4さんに作業上の不明点があるのかを確認したところ、用紙や物品名の弁別が完全にはできていないことがわかった。そこでO4さんに、使用する用紙名や物品名、それらの内容と機能の説明を詳細に行ったところ、作業への取りかかりはスムーズになり、作業そのものも素早く行えるようになった。また、「計算する」という言葉での指示ではO4さんは指示の意図する内容を理解できなかったが、「集計する」という言葉で言い換えると理解することができた。

一方、O4さんは、計算自体は正確だったが、「不良率」の教示を正確に理解できておらず、桁処理のエラーが生じていた。そのため、質問事項を随時書き加えさせながら、作業指示書を活用させ、それを参照しながら作業を進めるよう指導した。作業終了時には、作業内容記録表に作業工程や注意事項等を整理させ、以後の作業で活用するよう促した。

また、文書入力、検索修正では、全角および半角の文字サイズを弁別できずにエラーが生じていた。また、入力する際に、言葉を適切な文節で区切らず、1～3音節で区切って入力する（例；「アルファベット」を「アル／ファ／ベット」と区切って入力する）ことが特徴的であった。また、1問入力し終わるごとに、入力内容と問題をじっくりと照合することが多く、同時に、首を横に2～3秒間振り続けたり、手をヒラヒラさせる行動が観察された。これらの見直しの時間は入力時間よりもかなり長い時間が費やされており、見直し後には空の一点を見つめて動きが止まりボーッとするなど、疲労の影響と思われる行動が観察された。このことから、文字や数字の照合作業は本人にとって負荷が高い作業であり、時間を要することが推察された。

これらの結果から、O4さんは、物品名等の名前・名称を理解しにくいこと、作業手順や留意点を整理するために補完手段が有効であること、O4さんが理解しにくい教示内容や言葉は、その言葉の詳細な説明を行う必要があるとこと、を確認した。また、照合作業（例：文字の照合）における負荷が高いために、それに伴う疲労が生じやすいことが推察された。

表 2-235 O4さんの事務作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | 数値チェック | 物品請求書作成 | 作業日報集計    | ラベル作成 |
|-----------|--------|---------|-----------|-------|
| 実施の有無     | ○      | ○       | ○         | ○     |
| 平均正答率 (%) | 100    | 100     | 94        | —     |
| エラー内容     |        |         | 加算、集計、不良率 |       |
| 備考）       | —：未実施。 |         |           |       |

表 2-236 O4さんのOA作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | 数値入力 | 文書入力  | コピー&ペースト | ファイル整理 | 検索修正   |
|-----------|------|-------|----------|--------|--------|
| 実施の有無     | ○    | ○     | ○        | ○      | ○      |
| 平均正答率 (%) | 100  | 80    | 88       | 67     | 40     |
| エラー内容     |      | 文字サイズ | 範囲指定ミス   | 分類ミス   | 詳細入力ミス |

表 2-237 O4さんの実務作業における平均正答率とエラー内容

| 課題名       | ピッキング  | 重さ計測    | ブラグタッパ | ナブキン折り |
|-----------|--------|---------|--------|--------|
| 実施の有無     | ○      | ○       | ○      | ○      |
| 平均正答率 (%) | 80     | 94      | 100    | 83     |
| エラー内容     | 商品選択ミス | 指定範囲外計測 |        | 手順の誤り  |

(4) MSFASによる情報収集の結果

MSFAS（利用者用）の様式Fシートによれば、これまでに相手からの指示や予定を忘れてしまい注意を受ける場面が多かったこと、何かを質問したり報告するようなコミュニケーションに課題があること、が記載されていた。この点をO4さんは自覚しているとのことだったが、実際の場面では適切な対処行動は見られなかった。また、疲労の自覚があっても、自ら休憩を取れないことが明らかになった。

#### （５）支援方針の検討

O4さんの場合、M-メモリーノートの集中訓練やWCST、M-ワークサンプル（簡易版）を実施する中で、物品の名称の覚えにくさ、照合作業の困難さ、疑問点の質問ができない様子が観察された。

そのため、M-ワークサンプル（訓練版）を活用する中で、M-メモリーノートを補完手段として活用し、作業上の不明点を整理・確認し、自立的な作業遂行が可能となるよう支援することとした。また、コミュニケーション上の問題への対応として、O2さんから質問をするよう段階的に働きかけ、自発的な質問へとつなげていくこととした。

また、MSFASの情報収集により、疲労を感じていても休憩を取得できない状況を確認したため、疲労のセルフマネジメント・トレーニングを行うこととした。

#### （６）M-ワークサンプル（訓練版）を活用した支援

##### （ア）M-ワークサンプルにおけるM-メモリーノートの活用

##### ①M-メモリーノートを使用する目的の確認と指導

M-ワークサンプル（簡易版）の実施状況およびMSFASの情報収集から、物品名等の名前・名称を理解しにくいこと、照合作業（例：文字の照合）における負荷が高いこと、一般的に理解しやすい言葉がO4さんには理解しにくい場合があることが明らかとなった。

そのため、補完手段としてM-メモリーノートの重要メモや作業内容記録表を活用し、それらを参照しながら作業をすることで、物品名等の名称、手順等を十分に理解し自立的に作業を行えるよう支援していくこととした。

また、O4さんは、トータルパッケージ１日目に、今日の予定を読み上げ、予定した行動を行うよう指示された時に、予定を読み上げることは出来ても実際に行動することはできなかった。O4さんに対し、今読み上げた予定通りに行動するよう再度指示したところ、O4さんは行動に移ることができた。このことから、O4さんは読むことだけに集中し、読んだ内容の理解ができないことがあると思われた。そのため、M-メモリーノートの活用には、記入内容を理解するよう心がけ、記入した内容を実際の生活や作業での行動に繋げるよう指導した。この指導の後、O4さんは、M-メモリーノートを繰り返し読み返して内容を確認するようになり、自立的な行動が可能となった。

##### ②重要メモの活用

２日目には、M-ワークサンプル（訓練版）の文書入力（図２－１０９）を実施した。

レベル１の評価期（TR）ではエラーが生じたため、訓練期（TR）に移行した。訓練期では、補完行動として「入力結果の見直し」を導入し、O4さんに入力結果の見直しの方法を重要メモに記入させ、それを参照しながら作業を進めるよう指導した。その結果、O4さんは重要メモを参照しながら補完行動を行い、入力後のエラーを自己修正できるようになり、訓練期、訓練後の評価期（PR）では、100%の正答率を維持することができるようになった。



レベル3や4評価期（BL）では、O4さんが苦手と話していたカタカナや英字、全角・半角の入力ミスが生じた。これらのミスに対しても、レベル1同様個々の文字種を丁寧に見直すよう指示すると共に、注意する文字種について重要メモに記入させ、その内容を参照しながら補完行動を行うよう指導した。その結果、各レベルとも訓練後の評価期（PR）では100%の正答率を維持することができるようになった。

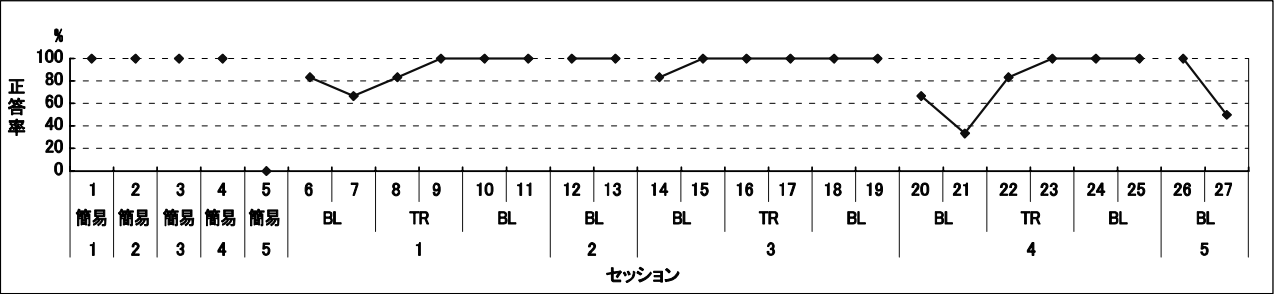


図 2－109 O4さんの文書入力課題の結果

③作業内容記録表の活用

重要メモの使用に慣れたことや、同様の作業が継続したため、4日目にはM-メモリーノートの参照をより多く行う必要がある課題として作業日報集計（図2－110）を実施した。

作業日報集計の実施を指示したところ、O4さんはM-ワークサンプル（簡易版）の実施時に作成した作業内容記録表を自発的に取り出し準備を行うことができた。準備の後、指導者は、改めて作業日報集計の作業手順や注意点を教示し、追加した方が良い留意点等があれば、作業内容記録表に書き加えた後、それを参照して作業を行うよう指示をした。

レベル2の評価期（BL）では、エラーは生じなかったものの、不良率の計算について質問が出たため、指導者から質問に答えると共に、作業内容記録表に追加するよう促した。また、記入した内容を参照して正確に作業を行うことを目標として設定し、訓練期（TR）に移行した。訓練期（TR）では不良率の計算でエラーが生じたが、M-メモリーノートの参照を促すことで、自己修正することができた。その後、レベル2の評価期（PR）においても100%の正答率を維持することができた。

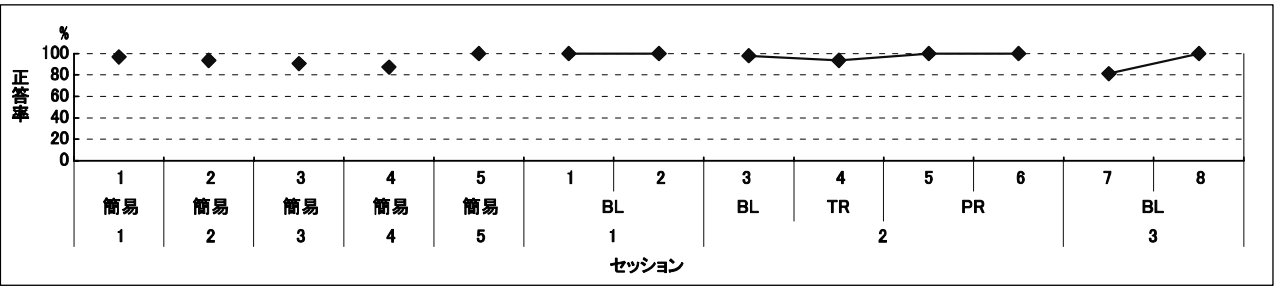


図 2－110 O4さんの作業日報集計の結果

（イ）M-ワークサンプルにおける質問行動の指導

2日目から実施した文書入力（図2－109）のレベル1では、作業の不明点等の確認した内容については逐次、重要メモに記入するよう指導を重ねた。O4さんに対しては、作業について不明な点等が生じた場合

はまず重要メモを参照して確認し、それでも疑問が解消できない時には積極的に質問をするよう指導を行った。

この指導により、O4さんは M-メモリーノートの重要メモの参照を自発的に行い不明点等の確認と整理をすることはできるようになったが、質問はできず、文書入力レベル2を実施中には、指導者をじっと見つめる様子が観察されるようになった。そのため、O4さんと目が合った時に、指導者から質問の有無を確認するよう働きかけた。

3日目に行った文書入力レベル3の訓練期（TR）では、O4さんは、手を挙げて「質問があります」という行動をするようになった。この行動に対し指導者は、「質問をすることは良いことである」と強化し、質問に回答した。これが数回続いた後、O4さんに対し、手を上げないで済む質問方法として、指導者への声かけの方法を例示した。

これらの指導の結果、O4さんは、4日目の作業日報集計（図2-110）の作業から、手を挙げたり、指導者に声をかける方法で自発的な質問をすることが可能となった。

#### （ウ）疲労のセルフマネジメント・トレーニング

2日目に行った文書入力（図2-109）のレベル1の訓練期（TR）では、見直し作業をしている時のO4さんの行動として、首を横に振る、あるいは、手をヒラヒラさせる、見直し後に一点を見つめてボーッとする、といった簡易版を実施した時と同様の状態が観察された。そのため、レベル3の評価期（BL）までは、このような症状が頻繁に観察された時には、指導者からの指示で休憩を促した。

4日目の作業日報集計（図2-110）の作業場面では、作業の質問に混じって、休憩の取得に関する相談や依頼が行われるようになった。この結果、O4さんは、自発的に適切なタイミングで、指導者に報告・相談しながら休憩を取得することができるようになった。

O4さんは、M-ワークサンプルの作業場面で、M-メモリーノートの重要メモや作業内容記録表に作業手順や詳細な説明事項を記入し、補完手段として活用した。また、補完行動として見直しを行い、注意深く作業するよう支援した結果、正確な作業遂行が可能となった。これらのことから、補完手段としてのM-メモリーノート、注意の持続困難を補うための補完行動の有効性が確認された。

一方、O4さんは、M-メモリーノートを参照しながら不明点を確認し、質問する方法を学び、自発的な質問行動が増加した。この行動は、休憩の取得について報告・相談についても般化し、4日目には自発的な行動として現れるようになった。

O4さんは、アスペルガー症候群という障害特性上、コミュニケーションスキルの発揮が苦手であることが挙げられるが、作業場面での「質問の方法」を学ぶことで、休憩の相談といった場面にも、この行動が般化し、休憩についてのセルフマネジメントスキルの一つとして学習が成立したものと考えられる。

＜参考文献＞

- 船津恵子 金子満雄 1987 前頭葉障害に対する評価と機能訓練の試み 失語の経過と予後（別冊） 医学教育出版社
- 今村陽子 2001 臨床高次脳機能評価マニュアル2000 新興医学出版社
- 小林重雄 山本淳一 加藤哲文 1997 応用行動分析学入門 学苑社
- 障害者職業総合センター 2004 調査研究報告書No.57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（中間報告書）

## おわりに

職業リハビリテーションにおける訓練・評価ツールとしての「トータルパッケージ」の開発のために、専門部会外部委員の方の所属機関をはじめとして、広域障害者職業センター、各地の地域障害者職業センター等から、トータルパッケージを臨床的に試用しての情報を提供していただいた。

ツールの開発は現場での検証なしには行い得ない。トータルパッケージの開発においても、さまざまな試行錯誤があったが、それらを乗り越え、開発を終えることができたのは、実践現場からの適切なフィードバックであり、貴重な参考意見の賜物である。協力いただいた機関、協力実施担当者、協クライアント（対象者）の皆様には深く感謝申し上げる次第である。

その間に提供いただいた実践情報の量は膨大なものとなった。それらはトータルパッケージを利用するうえでの多くのアイデアや発見に満ち、それゆえに、今後の利用に対するノウハウの提供にも格好の素材と考えられた。かくして、事例集としての「活用編」が企画されることになった。

この「活用編」を完成させて、最終報告書（「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究最終報告書」）と揃えて、開発研究を終結させることができたことは担当者一同にとって大きな喜びである。

同時に、トータルパッケージの開発が多くの実践現場との連携によって成り立ったことを明らかにすることになり、その意味で開発側と関係者にとって誇らしい成果ともなるはずである。

本研究を開始した契機として、わが国の職業リハビリテーションの状況が大きく変化してきたことがあった。

すなわち、かねてから言われてきたように、職業リハビリテーションの対象となる障害者においては障害の重度化とともに、精神障害者、高次脳機能障害者、広汎性発達障害者等の、より複雑な職業的な課題のある対象者が顕在化し、従来の評価手法では十分な問題性の把握や、問題解決の方向性を見出し難い場合が現れてきていた。

そこでは、伝統的な職業リハビリテーションの技法が十分な有効性を発揮できなくなっており、「職場を利用した訓練」「職場内での直接的支援」「地域に根ざした支援」などの新しいパラダイムの下で、他領域との連携、ジョブコーチの役割などが重要視される中で、クライアント（対象者）への支援の方向がいろいろと模索された。

そうした状況を踏まえながら、職業リハビリテーション領域で提供されているサービスやプログラムを、より効果的にするだけでなく、それらの本来の在り方を具体化できるツールの開発を目指すことになった。

「活用編」には既存の事業の中で活用された事例を収めることができた。地域障害者職業センターにおける「職業評価」「ワークトレーニング」「自立支援コース」への活用、「ジョブコーチ支援」「職場復帰支援」の場面などでの利用や、医療機関や職業訓練と絡めての利用の例を示すことが出来た。これらは今後の

利用に多くの可能性を示すことになっている。

多くの事例を通して、トータルパッケージが持つ大きな特徴に気づいていただけるはずである。トータルパッケージの構成要素はWCST、M-ワークサンプル（簡易版）、M-ワークサンプル（訓練版）、MSFAS、M-メモリーノート、グループワークであるが、事例ごとの必要性に対応して、これらの要素を組み合わせ利用していることが見られる。決して、特定障害や、特定目的に沿った利用が行われている訳ではない。それこそがトータルパッケージ開発のコンセプトのひとつであった。

今日の職業リハビリテーションは、クライアント（対象者）における障害状況やニーズ、家族等、支援側の条件など、個別的、特異的な状況に応じて支援内容を決定して、実践することが求められる。しかし、トータルパッケージの実践事例からは、複雑な障害特性を示すクライアント（対象者）の職業リハビリテーションにおいて対応すべき問題として、「障害認識」「セルフマネジメント」「補完手段」「補完行動」「環境調整」に的を絞り、解決を図ることの重要性が浮かび上がっている。

クライアント（対象者）のニーズ、トータルパッケージを組み込もうとする事業の特性、担当する実践家の狙いなどによって、トータルパッケージの各要素をどう組み合わせ、どのように利用してゆけば良いかについて、それぞれの事例は効果的な案内役を務めることが期待される。しかし、それによって、トータルパッケージ利用を一定の枠に収めようとする意図はない。

モデルとした事例をなぞって、型どおりに実施すれば、示された事例と同じ結果や帰結が得られるというものではない。トータルパッケージ利用のメリットの多くは利用する実践者の専門性、経験や力量に関わってくることになる。

トータルパッケージは職業リハビリテーションにおける、新しい技法・ツールとして、実践者の業務を助けるものであるが、それは専門的技法を発揮できる場面を効果的に作り出すことができることで達成されるものと言える。

実践事例の記述には、「ストレスマネジメント」「コーピング」「課題分析」「般化」「システマティック・インストラクション」などの概念や手法に基づいた記述が現れている。こうした基礎となる事柄への理解や経験なしに、トータルパッケージの利用結果や効果を考えることはできない。単に作業課題やチェックリストとして利用されるなら、トータルパッケージの持つ特長は失われてしまうことになる。

つまり、トータルパッケージはあくまでもツールであって、ツールとしての扱いに長けるだけでなく、「シングルケース研究法」などの専門的技法、戦略があってこそ、十分な効果が保証されるということを忘れてはならない。ところが、往々にして、ツールとして目に見える部分だけが受けとめられ、そこに込められた本質が捉えられにくくなってしまふことがある。

トータルパッケージはパッケージとして、ワークサンプルを構成要素に含んでいるが、わが国ではワーク

サンプルを評価機材として、そして「ワークサンプル法」を評価法とだけ、受けとめてきた。

しかし、かつて、国立職業リハビリテーションセンターが開発した「マイクロタワー日本版」を始めとする「ワークサンプル法」をそのように区分することは皮相的である。

「マイクロタワー」には評価機能に留まらないさまざまなノウハウが込められ、その時代の米国における職業リハビリテーションの到達点が示されていたと言えよう。それらは、例えば「自己認識を深めさせる作業体験」「十分な職業情報の提供」「結果を共有する職業評価」「インフォームドコンセント」「グループダイナミックスの利用」などの狙いに沿って、作業課題を選択、実施して「職業現場写真」「作業の自己評定シート」「グループ討議」などの場面を提供していた。さまざまな支援と道具が結びついた技法であった。しかし、わが国では、専門職制度に関する土壌や多くの周辺状況の違いから、そうしたノウハウは十分に伝達されず、評価道具としての側面のみが取り上げられ、時間や手間のかかる検査器具の一つとの位置づけに留まってしまったと思われる。

このように考えると、トータルパッケージは「ワークサンプル法」本来の長所を、わが国のニーズの状況に合わせて実現したものと言えなくもない。勿論、それにはトータルパッケージの各要素の組み合わせを十分に生かすことに依ってである。

トータルパッケージ利用のあり方を実践事例の中で見ると、かつての判定（評価）のように一方的な評価を目指すのではなく、まず、障害状態の認知に向けて当事者とともに評価を行い、当事者が挑戦することがらと、支援者の支援すべき方向を明らかにしようとしている。さらには、当事者が挑戦する方向に向けて、「自立」を目指す訓練機会の提供を含んで、状況改善の手立てをさまざまに提供する糸口とも、過程ともなっている。トータルパッケージは専門家向けのツールとして、職場での直接的支援サービスも視野に入れながら、職場への参入に先だって問題点を十分に把握し、問題発生を予防するために、施設内評価・訓練を行おうとするが、それらは、今後、職業リハビリテーションの主要な場となる事業所が蒙る不利益を未然に防ぎ、また、職場で発生した問題点の解決方法を実証的に検討し、解決する場面を提供することにも繋がるものである。

今回の「活用編」に収めることが出来た事例の範囲は偏っており、例えば、発達障害に関連した実践事例には乏しい。それは、トータルパッケージ開発を行った際の研究テーマの設定に沿ったことから生じている。今後、トータルパッケージの利用範囲を広げ、有効性を拡大してゆくためには、新たな実践事例を蓄積し提供してゆくことが必要と考えられる。また、トータルパッケージをめぐる実践では、狙いと異なり、必ずしも十分な効果が得られず、失敗と見なされる場合も起こることも無いとは言えない。トータルパッケージが専門性を発揮する道具であるためには、そうした事例を含めた新たな試みに関する事例を検証し、そこから共同で学べる情報交換の場の必要性も大きくなる。

トータルパッケージの開発作業は、最終報告書で示したようにひと区切りがつけられたが、その有効性の

拡大のために開発側が担うべき役割はまだ存在している。例えば、作業課題実施後における参考基準の整備がある。

また、職業リハビリテーションにおける技法について、更なる開発を目指す企ても存在している。トータルパッケージは実践家の専門的業務支援のツールであるが、その特長の部分的な活用によって、より広い場面において利用されるツールを準備するということである。例えば、家庭に持ち帰って訓練できるホームワーク・パッケージや職場の中で利用できる実習用パッケージの開発である。

リハビリテーションの思想と実践は近年、大きな変革が見られており、職業リハビリテーションの制度、実践もグローバル・スタンダードから評価される時代となっている。わが国もジョブコーチの導入によって職場における支援を実現している。そして、その先は仕事に従事する障害者へのナチュラルサポートの確立に向けられよう。

そうした中であって、トータルパッケージを発展させ提供してゆくことは、効果的な職業リハビリテーションの推進にとって重責を担うことと考えている。





視覚障害その他の理由で活字のままでこの報告書を利用できない方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等を作成することを認めます。

その際は、下記までご連絡下さい。

障害者職業総合センター 企画部企画調整室

電話 043-297-9067

FAX 043-297-9057

なお、視覚障害者の方等でこの報告書（文書のみ）のテキストファイルをご希望されるときも、ご連絡下さい。

調査研究報告書No. 64

精神障害者等を中心とする  
職業リハビリテーション技法に関する総合的研究  
(活用編)

---

編著・発行 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構  
障害者職業総合センター  
〒261-0014  
千葉県美浜区若葉3-1-3  
電話 043-297-9067  
FAX 043-297-9057

発行日 2004年3月

印刷・製本 株式会社弘報社印刷 幕張営業所

---

© 2004 障害者職業総合センター